第８７号　日本共産党我孫子北地域後援会ニュース　２０２２年１１月

北地域後援会は我孫子１～４・久寺家・台田・つくし野・並木・根戸・布施のエリア

しらかば北

発行責任者
井上文夫

来年1月には我孫子市長選挙が行われます。今の星野市長が5期目をめざして立候補を表明しています。4期も続いている星野市長について、皆さんの意見を聞いてみました。

星野市政にもの申す

災害時の避難場所を

災害時の避難場所を作ってほしいです。普段は誰でも自由に利用できる、ゆっくり休める場所、トイレなど遠慮なく使える安心できる施設を作って欲しい。

また、「広報あびこ」に平和宣言を復活させる。

（女性　つくし野）

補聴器購入の補助を

高齢になって耳が遠くなった。補聴器が欲しいが高額で手が出ない。野村貞夫議員が議会で補聴器購入の補助を求めているが、市長は応えようとしない。

一日も早く実現して欲しい。

（女性　つくし野）

子どもの医療費無償化を

我孫子市は15歳（中学３年）までであるが、国も18歳までの無償化実現を目指している。

我孫子市は早急に実現してもらいたい。（女性　久寺家）

学校給食は自校方式を

我孫子市の小中学校給食は全国に誇れる自校方式を行っている。子どもたちの健康維持のためにも自校方式の維持をしてもらいたい。（女性　久寺家）

学校給食費を全ての生徒に無償化を

我孫子市では第３子以降は無償であるが、全ての生徒を無償にして欲しい。

給食の材料は地元の安心安全な食材を使って欲しい。

（女性　台田）

通学路の安全確保を

通学路の危険箇所があり、道路の巾を広げるように野村貞夫議員を通して市に要望しているが、国や県の問題であるとして積極的に対応してくれない。

子どもたちが安心して通学できるよう、市はもっと積極的に国や県に働きかけてほしい。

（男性　我孫子）

市庁舎建替えは市民の意見を

市民団体のニュースを見たら、我孫子市庁舎建替えの計画がでていた。市全体に係わることなので、市長は建替え計画を公にして市民の意見を聞くべきだ。

（男性　つくし野）

自然豊かな手賀沼

都心から1時間余りで自然豊かな公園や森がある我孫子は、孫たちには魅力ある街です。

カエルやザリガニ、蝶、トンボなど見ることができる自然豊かな手賀沼は我孫子の宝です。

アビスタを中心に水の館あたりまで、子どもたちが安心して遊べる遊具を作ってほしい。

また、スポーツができるゾーンも伸ばしてほしい。

中高校生が走れてキャッチボールができ、サッカー・バスケットボールの練習ができる場所を作ってほしい。

休日の手賀沼のほとりは子どもたちであふれ、遊具の取り合いです。

（女性　台田）

やさしい街へ

我孫子市は坂道が多く、歩くと鍛えられるなどと呑気なことは言ってられません。我孫子の道は危険がいっぱい。

３５６号道路沿いは歩道のないところが、何か所もあります。

あるのは側溝のフタです。

フタの上を歩いているのです。

側溝を歩道と考えているのではないでしょうね。

しかも人がすれ違うこともできない狭いところもあります。

そこを通学に、通勤に。とても散歩には使えません。

やさしい街づくりをしたいものです。（男性　我孫子）

市政にのぞむこと

弱い立場の人に優しい市政であることを望みます。

第一には子どもの教育についてです。

我孫子に育って「ほんとうによかった」「我孫子が大好き」と言えるような人。どの子も豊かな感性をもち、しっかりした足取りで人生を歩んでいけるような教育が必要です。

お金がかかることですが、環境の充実はもちろん、教師への待遇の充実、市をあげての教師たちの連携や研修に予算を上げて欲しいと思います。

（女性　並木）

花火

「ジェンダー平等」という言葉をよく耳にするようになりました。社会における様々な男女格差を無くしていこうということですが、「ユネスコ」のジェンダーに関する記事では、男女の不平等の身近な例として次のように解説されていました▼「男性は一家の大黒柱として、家庭の経済の全責任を負うのが当たり前であり一人前、そのため朝から晩まで働け、女性はリーダーになるのではなく、男性の補佐、そして家庭に入り、子どもを育てるのが使命」。また「男性がスカートをはくのはおかしいとか、女性が黒いランドセルを背負っているのはおかしいとか、そういった『社会的につくられた男女の暗黙のルール』がジェンダーと考えると分かりやすいかもしれません」となっています▼私のような戦前生まれの人間にとっては、これまで「男性は外で働き、女性は結婚したら家庭に入るもの。男性はズボン、女性はスカートが当たり前」という考えに何の違和感もなく過ごしてきました▼でもこのような考えは、ジェンダー平等という観点から言えば「失格」といえるでしょう。選択的夫婦別姓や同性婚を認めることも入っているジェンダー平等の視点をしっかり身につけたいと思います。（井）

この新聞は、２月まで白黒印刷となります。

（表面よりつづく）

市民生活に密着した施政を

地方自治らしく、市民生活に密着した施政、施策を願う。

とりわけ、児童生徒とその家族の目線に沿った学校の充実、高齢者が孤立しないよう目を配り、その生活相談・交流を強化する部署の設置と職員の配置を求める。

（男性　根戸）

子どもたちに豊かな給食を

今日の給食は〝なにかなあ〟お昼が近くなると、給食を作っているとてもいい匂いがしてきます。出来たての温かい給食は心も温かくしてくれます。給食の時間には、給食に使われている魚や野菜の話、手づくりのソースの名前や作り方など、栄養士さんの話が聞えてきます。

子どもたちにとって給食の時間はとても楽しみ、学校生活を豊かにしています。

不登校問題の対策として学校給食の目的の「学校生活を豊かにする」という点を重視し、給食の質を高める努力をしている自治体もあります。

我孫子の給食は、全校が自校調理方式で、全校に栄養士が配置されているから出来る豊かな給食です。食物アレルギーのある子どもたちも、お弁当を持参することなく同様の給食が提供され、地産地消の安全な食材を使用した給食など、他市に比べても優れた給食は、絶対に無くさないで欲しいと想います。（晶）

住井すゑ文学館に行ってきました

晴天に恵まれた11月4日、牛久駅西口からコミュニティバスかっぱ号で、カッパの画家小川芋銭「雲魚亭」の周囲を散策し、「橋のない川」の著者・住井すゑ「住井すゑ文学館」へ。

展示棟では家族やゆかりの人々を知る事が出来、夫や子供達への愛情と友人、知人への思いやりの心も感じられました。又、万年筆等の愛用品や多数の蔵書の数々も展示されていたので、なおさら住井すゑの人となりを知るものとなりました。強靭な精神力と優しい心をもち、差別に対して許すまじとした気持ちは現代にも通じるものがあると思います。

世の中の差別や偏見が少なくなる事を願うばかりです。

見学が一段落した後のお昼ご飯は、牛久沼のほとりで、ゆっくり、のんびり楽しむ事が出来ました。

文学館に誘って下さった「しらかば北後援会」の皆様には大変感謝しております。

（白山　平山）

国葬に想う

国葬とは「故人に対する敬意と弔意を国全体として表す儀式」とか。その公的儀式で国民代表でも国会議員代表でもない、友人代表の弔辞に違和感を覚えました。それも、その友人とは安倍内閣の官房長官だった管氏です。

吉田茂の国葬では当時の総理大臣が弔辞を読み、献花が行われ淡々と進行したようです。

弔辞で語られた、管が安倍をかき口説いて2度目の総裁出馬を決意させた話。下戸の二人が銀座の焼鳥屋で3時間も話す不思議、庶民感覚では焼鳥屋のカウンターの片隅でのひそひそ話を思い浮かべます。しかし焼鳥は食べたとしても、元総理なら人払いのできる料亭の個室でしょう。政権の立役者を誇る管の鉄板ネタのようです。語るにつれ、場所や食べ物が万人受けに盛られたのでは？

山県有朋の歌の目撃談、本当なら故人となった議員の個室に入って机の上の書籍を見てマーカーの跡まで確認する何と無礼。実はこのネタは今年6月安倍氏が他の故人の追悼に当たりSNSに投稿したとのこと、あきれてものが言えない。管の弔辞のあと拍手が起こったとか。まず非礼、何に対する拍手か、弔辞に対する感涙？山口県の元市長が拍手を始め周辺に広がった。葬儀でのマナーを打ち捨てての効果狙い。

英国の国葬の規模と荘厳さに気圧されてか、情に訴え創作、盛作、過剰演出なんでもあり。国全体の儀式を10億円以上かけて田舎芝居に化かされては、主権者はたまりません。

（香）

この人に聞く

加藤英一さん（2）

加藤さんが特許庁に就職した１９５４年には、３月にビキニの水爆実験での第五福竜丸などの遭難があり、原水禁運動の初期の広がりの時期であったが、その時期のことは就職に伴う移動などに取り紛れて覚えていないという。東大時代の旧友の下宿に転がり込んで居場所が確保できてから、労働組合にも目が向いた。通産省の全国組織傘下の特許庁分会は、50年のレッド・パージでの打撃から困難が多かったが、57年に分会青年部長に選出された。58年初に、加藤さんは直属の上司がヒロシマで被爆したことを知り、取材して青年部ニュースに掲載した。青年部は署名やバッジの普及にも取り組み、初めての平和行進が東京に入る時には多くの青年部員が参加した。さらにその上司を原水禁大会に送ろうとの声が広がり、分会が千代田原水協に加入して管理職の上司は大会に参加した。

58年の秋に全国組織の中央執行委員に委嘱され、加藤さんは組合が本格的に原水禁運動に取り組むことを条件に受諾し、組合は大臣宛要求書に原水爆禁止を明記した。翌年になって要求書に基づく池田勇人通産大臣との交渉が型どおり終わったが、その直後に官房長から委員長に、大臣が原水禁運動について３万円の寄付金で協力するとの意向が伝えられた。組合は東京―広島間の平和行進をリレーでつなぐ企画を全額資金カンパで実施することにした。この組合は大都市にしか職場がなく、横浜の次は名古屋、その間を３～７日ごとに東京から要員を派遣して歩いた。59年には加藤さんの組合だけであったリレー行進は、60年には多くの全国組織が採用し、草の根の地域活動の典型の一つになった。

加藤さんは１９９０年に定年退職されたが、管理職として組合員資格を失ってからも組合の平和行進に参加し、80年代の終わりからは広島大出身の委員長経験者の友人と二人で、浜松―豊橋間を２０１８年まで毎年一日行進を続けたという。

（次号に続く）